

リュートについて

リュートはアラビア起源の楽器で、その名はアラビア語で「木」を意味するアル・ウッドに由来している。リュート属は紀元前 8 世紀頃からイランに、紀元前 3 世紀頃から中国へ渡り琵琶に、紀元後インドに伝わりシタールに、日本には中国からモンゴルを経由して伝わり琵琶となった。またイスラム文化圏の中近東にも伝わり、10 世紀から 11 世紀初頭にヨーロッパへと伝わった。

リュートの最も特徴的で美しい口ゼッタはギターサウンドホールにあたるものである。口ゼッタは薔薇紋様の装飾が施されており、その紋様は円に内接する多角形を基礎とする幾何学的文様と薔薇の花や蔓などを流麗な唐草模様にしたいわゆるアラベスクで、その起源がアラビアであることの名残をとどめている。

15 世紀にはポリフォニー（多声音楽）が盛んになり、表現上必然的に指で直接弦を弾く奏法が生まれた。16 世紀初頭、リュートは主として声楽の伴奏楽器として使用されたが、独奏用としては声楽曲をリュート独奏用に編曲されたものが最初である。やがて、楽器の性能に則した器楽曲が誕生し、独立したリュート器楽曲の新しい分野が切り開かれていった。

リュート属には構造によってルネサンスリュート、バロックリュート、アーチュリュート、テオルボなど様々な種類がある上、弦長、コースの数、ピッチ、調弦方法も様々である。ルネサンスリュートの場合には、洋ナシを縦に割った形のきわめて薄く軽い材料で作られたボディ、短いネックに、ペグボックスがほぼ直角に取り付けられている。

弦については、当時は子羊の腸を撚って作ったガット弦が用いられ、1 コースが単弦、2 コース以降は復弦であり、通常 4 コースまでがユニゾン、5 コース以降はオクターブに調弦される。この際、比較的弱い張力（テンション）で張られる。

また、フレットにはガット弦が用いられネックに結わえ付けられているため、動かすことが可能である。

左指の弦の押さえ方はギターの場合と同じであるが、右手は爪を使わず、小指を表面板に軽く置き、他の指は各弦とほぼ平行に構えるのが歴史的といわれている。

右手は指の力で弾くというより弦を押して軽く外す（弦のストレスを開放する）という感じである。

親指は弾弦した後、通常は次の弦に寄りかかる（いわゆるアポヤンド奏法）が、その際人差し指の内側になるのが歴史的な奏法といわれている。なお、親指以外の指はいわゆるアルアイレ奏法が通常である。

親指と人差し指を交互に交差させて弾弦するファイゲタとよばれる奏法もリュート独特の奏法の一つであり、適切なアーティキュレーションを実現する上で擦弦楽器の運弓法（ボーイング）と同様きわめて重要な要素である。

リュート用の楽譜は文字譜ともいうべきタブラチュアというリュート特有の記譜法が用いられる。リュート・タブラチュアには大別してイタリア式、フランス式、ドイツ式の 3 種類がある。いずれも弾くべき弦、押さえるべき位置、音の長さを一義的に把握することができる。

従って、様々なピッチ、様々な調弦法があるリュート属の場合、モダン譜よりも合理的である。ただし、ポリフォニー的な曲の場合は各声部の動きが視覚的には分かりにくいので、知識と経験が必要である。